慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | StendhalとNapoléon伝説 |
| Sub Title | Stendhal and the Napoléon legend |
| Author | 竹内, 富美子(Takeuchi, Fumiko) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1977 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.36, (1977. 3) ,p.235(78)- 255(58) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 森武之助教授退任記念論文集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00360001-0255 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# Stendhal と Napoléon 伝説

竹　内　富美子

Stendhal が Napoléon 崇拝者であったこと，彼が二つの評伝をはじめ種々の形式で Napoléon について多くを語ったことは周知のところである。1817年から1818年にかけて，また20年の歳月を隔てた1837年から1838年にかけて，ともに未完のまま放置したとは言え，Stendhal は二度にわたって Napoléon の評伝を執筆している。[(1)] 絵画論，旅行記，論壇時評，自伝等の作品にも Napoléon に言及した文章が数多く見出される。小説も例外ではない。Stendhal の小説には必ず Napoléon が登場する。特に，*Le Rouge et le Noir, La Chartreuse de Parme* は Napoléon を主要テーマの一つとした作品とも言えよう。王政復古期の社会に真向から挑戦する *Le Rouge et le Noir* の Julien Sorel は，Napoléon を唯一の行動規範とし，Napoléon や Napoléon の時代についての間接的知識をあらゆる判断の絶対的な価値規準としている。もし，この作品から Napoléon を取り除いてしまえば，王政復古期の社会と Napoléon によって象徴される一つの理想的世界との対比が Julien Sorel の内で崩れ去り，それによって，Julien Sorel という人物像は稀薄なものになる。そればかりか，そのすべての行動自体が説明のつかないものになる。Maurice Bardèche も *Le Rouge et le Noir* を論じながら，この小説に遍在する Napoléon を次のように説明している。

"Napoléon est partout dans le roman de Stendhal. Il est partout parce qu'il explique tout. Pas seulement Julien Sorel et l'ambition de Julien Sorel, mais tout ce tableau du XIX$^{e}$ siècle. Il n'est pas un modèle, il est un mythe. C'est son nom qui donne un sens à l'esprit de refus et de colère. Il symbolise le contraire de tout ce

qu' on voit.[2]"

また，Stendhal の生涯の総決算とも言うべき作品，*La Chartreuse de Parme* は，1796年5月1日，Napoléon のミラノ入城から書き始められている。一六世紀イタリアの中編小説，*Origine delle Grandezze della famiglia Farnese* を翻案するにあたり，Stendhal が冒頭の二章を Bonaparte 将軍のミラノ入城とイタリアにおけるその波紋との描写に当てているのは意味のないことではない。*Encyclopédie* と Voltaire を生み出し，啓蒙期の思潮を背景に大革命を体験した国の若い将軍が「暗黒」の世界に沈むイタリアを救うため大軍を率いて乗り出してゆく。これは，Napoléon を語る際，Stendhal が好んでしばしば口にしたテーマであった。多くの点で Napoléon を厳しく批判していた Stendhal も，1796年のイタリア遠征には常に手放しの賞讃を送っていた。[3] それに，この作品において，主な登場人物はすべて Napoléon との関係によって性格規定がなされている。この点について，K. G. McWatters は次のように言っている。

"*La Chartreuse de Parme* est un roman où les personnages se divisent très nettement en deux camps, comme dans un *western*. Il y a même deux frères, l'un bon, l'autre mauvais……Or, tous les personnages《bons》ont eu quelque contact avec Napoléon.[4]"

このように Stendhal の作品，特に小説は Napoléon のもつ意味を無視しては理解しえない側面をもっている。こうした点については，Jean Tulard も，"Le héros stendhalien, qu'il se nomme Julien Sorel, Lucien Leuwen ou Octave de Malivert, n'a qu'un modèle : Napoléon.[5]" とまで言い切っている。

もちろん，Napoléon に強い関心をもちつづけた作家は Stendhal の他にも数多くいた。作品の中で Napoléon を語った作家も Stendhal だけではない。例えば，Madame de Staël は自由主義知識人の旗頭として Napoléon との間に激しい闘争を繰り返し，その体験をもとに *Dix années d'exil*, *Considérations sur les principaux événements de la Révolution francaise* 等の作品を著わし，自己の立場の説明と正当化を行った。Cha-

teaubriand は，Madame de Staël と同様，実生活面で Napoléon とは常に緊張した関係にあった。その内面の軌跡は *Mémoires d'Outre-Tombe* によって辿ることができるが，そこに見られるように，Chateaubriand は死ぬまで Napoléon の精神的呪縛から逃れることはできなかった。また，Balzac も種々の階層の様々な Napoléon 観を *Le Médecin de campagne* 等の作品の中で描き出している。それに，Lamartine, Vigny, Hugo らロマン派詩人たちも Napoléon を題材にした作品を書いている。[(6)] このように，主として一九世紀前半に活躍したフランスの作家たちのほとんどは，実生活面，創作面で，Napoléon あるいは伝説と化した Napoléon から程度の差こそあれ何らかの影響を受けている。しかし，作品との関連という点から見る限り，Stendhal の場合，Napoléon との関係は前述の作家たちの場合とは比較にならないほど大きな意味合いをもっている。Stendhal にあっては，Napoléon との精神的，心理的関係は実生活面で彼を捉えていただけでなく，作家としての彼の創作活動においても常に重要なモチーフとなっていた。V. Del Litto が，"L'œuvre tout entière de Stendhal est placée sous le signe de Napoléon."[(7)] という表規で指摘している通り，Napoléon をめぐる問題は Stendhal の生涯と作品を解明する鍵として重要な意味をもっている。

以下，Stendhal の生涯における Napoléon の意味，彼の Napoléon 観，またその作品への反映といった問題を中心に，小説家 Stendhal を Napoléon 崇拝者としての側面からとらえ直してみたい。

## 1. 距　離——Distance

Stendhal はその生涯において終始一貫して Napoléon 崇拝者であったわけではない。また彼は，Napoléon を崇拝するようになってからも，決して無条件の Napoléon 讃美者ではなかった。Napoléon 崇拝者 Stendhal は同時に厳しい Napoléon 批判者でもあった。Stendhal と Napoléon の関係は決して単純な構造のものではない。彼の Napoléon 観は時期によって微妙な変化を見せている上に，ある特定の時期だけを取り出し

ても，同一人物が発したとは思えない程矛盾に満ちた Napoléon 評価が見られる。[8] Stendhal は Napoléon の内に何を発見し，何を崇拝するに至ったのだろうか？ 彼の Napoléon 観の複雑な内容を理解するにはまず，彼の内に Napoléon 崇拝が定着するまでの内面の変遷を当時の時代背景を考慮に入れながら簡単にでも辿っておく必要がある。

Stendhal は1800年から1803年まで，また1806年から1814年の帝政崩壊時まで，Napoléon 体制を支える行政官の一人として働いていた。特に1810年8月1日には auditeur au Conseil d'Etat に，次いで同じ月の22日には Inspecteur du mobilier et des bâtiments de la Couronne に任命され，1810年から1814年の皇帝退位時まで，彼はその社会的地位のおかげで生涯のうち物質的には最も恵まれた生活をしている。しかもこれは，1783年生まれの Stendhal にとって18才から31才までという青春時代のすべてを過ごした時期にもあたっている。このように，Napoléon が権力の座にあった時期，Stendhal の実生活は Napoléon と少なからぬ関係にあった。にもかかわらず，内面的なつながりは実生活上のそれとは必ずしも比例した関係にあったとは言えない。この時期の日記，書簡を調べても，Napoléon に言及した文章はほとんど見出せない。実生活面でのかかわりが深いだけに心理面においては意識的に捨象されている傾向すらある。ただ1804年だけは例外で，Napoléon が皇帝に即位し（5月18日），ノートル・ダム寺院で戴冠式の行われた（12月2日）1804年の日記には，Napoléon に対してかなり批判的な内容をもった文章が散見される。[9] Napoléon の権威主義的な性格，Concordat（政教一致）の調印，亡命貴族のうち Napoléon と和解した者の復権，といった Napoléon の諸政策が，革命時代に創設された Ecoles centrales の一つで一八世紀の啓蒙思想家たちを直接の師として育った自由主義者 Stendhal を苛立たせるものであったろうことは容易に察せられる。皇帝即位の件だけが特に日記に記されていることからも，この時，Stendhal の Napoléon への不信感が頂点に達したと考えることができる。このように，Napoléon が権力の座にあった時期，Stendhal は意識の世界では Napoléon に対し一定の距離を保っており，

むしろ批判的ですらあった。日常の観察を通じて，Stendhal は一国の統治者としてのNapoléon，軍人としての Napoléon の現実の姿を熟知していた。そして，ほぼ14年にわたる Napoléon のフランス支配には全体として否定的な評価を与えていた。Napoléon の治世に対する Stendhal のこの否定的な評価は，後で見るように，Stendhal が Napoléon 崇拝者となった後においても基本的には変わることはない。

Napoléon に対して距離を保ちつづけていた Stendhal が徐々に Napoléon への態度を変えていく契機となったもの，それは結論的に言えば，王政復古の下での極右王党派——これは ultras と称され，一般に「王より王党的」な性格をもつとされる党派であった——による反動的な動きであり，これによって生じた社会的な混乱であった。[10] Stendhal は王政復古が開始された直後，Napoléon を見放し，Louis XVIII の下で官吏の地位を見つけようと運動を行ったり，一方では，《Lettres écrites de Méry-sur-Seine sur la Constitution》[11] と題する政治的，哲学的論文を書いたりして，現実主義の立場から，Louis XVIII の下での王政復古の内に肯定的な意味を見出そうとする。しかし，官吏の地位を得ようと行った運動が失敗すると，1814年7月，祖国フランスを去り，イタリアに移り住む。イタリアにあって，Stendhal はフランスでの事態の推移を注意深く見守っている。王政復古への失望から Stendhal が徐々に Napoléon の時代を再評価し始めるのはこの頃からである。Stendhal における一種の回帰，しかも批判的な祖国への回帰が始まる。亡命貴族に対する賠償法案が議会に提出され，検閲制度が確立され，また，カトリック教会による教育への介入が制度化されるなど，王政復古の反動的性格が明きらかになる中で，Stendhal の内でも王政復古への不信感は相当深いものになってゆく。そして，1815年3月，Napoléon のエルバ島からの帰還に際しては，“Ce serait le triomphe de l'administration et le plus bel événement de sa vie.”[12] と記している。また，1815年7月には，パリが再度連合軍に占領されたという知らせに大きな衝撃を受け，愛国心をすら混じえた絶望感を日記に書き残している。そして，Louis XVIII が再度帰還し，第二次王政

復古が開始されたことを知ると，そこにフランスの不幸と腐敗を見る。一方，Napoléon の百日天下の終焉とともに，フランスでは特に南部地方を中心に bonapartistes に対する白色テロが猛威をふるい，王党派の反動はその頂点に達する。この王党派の白色テロは Stendhal の内部に決定的な影響を及ぼすことになる。帝政時代には皇帝に敵意をもっていた共和主義者や自由主義者が，王党派を共通の敵として bonapartistes とともに結集した。同様に Stendhal の内でも，かつての Napoléon 批判は微妙に変化してゆき，王政復古への失望はそのまま Napoléon 再評価へとつながってゆく。

## 2. 変　容——Métamorphose

王政復古との関連で Stendhal が Napoléon 再評価へと至る過程を見てきたが，これまでのところでは，Napoléon に対する Stendhal の評価は極めて流動的，不確定なものであった。Napoléon 再評価の際にも，明確な Napoléon 観が支えになっていたというより，王政復古に対する不信感の反作用としての側面が濃厚であった。しかし，これから考察する *Vie de Napoléon* では，以後24年の生涯において基本的には変わることのない Napoléon 像が Stendhal の内に形成されているのを見ることができる。Stendhal が1817年から1818年にかけて執筆した Napoléon 伝，*Vie de Napoléon* は，Stendhal においては，王政復古と Napoléon との対比的考察の総決算，*Le Rouge et le Noir*, *La Chartreuse de Parme* へと至る小説家 Stendhal の起点として位置づけることができる。まず，*Vie de Napoléon* の成立過程を追いながら，Stendhal の内に Napoléon 崇拝と呼べるものがはっきりと定着してゆく段階を見てみよう。

*Vie de Napoléon* の草稿が完全な形で公にされたのは Stendhal の他の作品と比較しても非常に遅く，Louis Royer が編纂して1929年に出版された Champion 版が初めてであった。[(18)] 次いで翌年1930年に，Henri Martineau の編集による Le Divan 版が出版されている。それ以後，この著作に関する研究も進み，今日では，Stendhal が執筆を思い立つに至

った経緯，各章の書かれた時期，利用された参考文献等についてはほぼ明きらかにされている。特に，V. Del Litto の *La vie intellectuelle de Stendhal, genèse et évolution de ses idées* (P. U. F., 1959年) に収められている研究は，彼自身が集めた新資料を駆使して Louis Royer の見解を検討しつつ書かれたものであり，これまでの研究の中で最も実証的なものとなっている。

Del Litto に拠れば，*Vie de Napoléon* の執筆が開始されたのは1817年5月末である。[14] 当時，一時帰国してパリにいた Stendhal は，5月28日，*Edinburgh Review* の第54号（1816年12月号）に William Warden の著書，*Letters from St. Helena* の書評がでているのを知る。Stendhal は早速この書評の翻訳に取り掛かり，5月30日に完了している。この翻訳文は *Vie de Napoléon* のいくつかの章に取り入れられることになる。こうして，*Vie de Napoléon* の執筆は書評の翻訳という形で始まった。1817年11月，ミラノに戻った Stendhal は本格的に仕事を進める。しかし，この段階で Stendhal が行ったことは，彼自身の考え方をまとめるというよりは，参考文献を読むことであり，その要約を作ることであった。[15] しかし，こうした仕事も1818年2月21日，エルバ島からの帰還の箇所を読み直したのを最後に一時中断される。Stendhal は，その頃イタリアで火ぶたを切ったロマン主義文学論争に参加し，これに熱中する。ほぼ4ヶ月の中断の後，Madame de Staël の遺著，*Considérations sur les principaux événements de la Révolution française* を読んだことが直接の契機となって，Stendhal は再び *Vie de Napoléon* に取り組むことになる。Madame de Staël の Napoléon に対する敵意に満ちた見解が Stendhal を激怒させたのである。中傷に対する反駁という明確な意図の下に，彼は6月14日から約2ヶ月にわたって執筆を続ける。中傷に対する反駁の書としての体裁は整えられるが，Napoléon 伝としては未完のまま8月18日，執筆は最終的に放置される。

こうして，最終段階において，*Vie de Napoléon* は Madame de Staël の中傷に対し Napoléon を擁護する文書としてその形を留めることにな

った。次に示す第一章冒頭の文章からも明きらかな通りである。

"J'écris l'histoire de Napoléon pour répondre à un libelle. C'est une entreprise imprudente puisque ce libelle est lancé par le premier talent du siècle contre un homme qui, depuis quatre ans, se trouve en butte à la vengeance de toutes les puissances de la terre."[16]

しかし，Napoléon の歴史を書こうとした Stendhal の意図は最初から Napoléon 擁護にあったのだろうか。そうではないと考えられる。少なくとも執筆開始直後の Stendhal には，Napoléon 擁護の任務を自己に課していた形跡はない。それどころか，すでに王政復古との対比的考察を通して帝政を見直し始めていたにもかかわらず，Stendhal は，*Vie de Napoléon* 執筆開始直後にはなお，"Vive le Roi. Vive la charte. 30 mai 1817."[17] などと書いているのである。さらに，*Vie de Napoléon* の下書原稿の余白には，次のような大胆な文章すら見出せる。

"Misérable scélérat! en quoi il est bien inférieur à l'homme sage qui nous donne la Charte. Oui, sans la réaction des ultras, il n'est de Français qui ne méprisât souverainement Napoléon."[18]

これら矛盾に満ちた発言はどう理解すればよいのだろうか。また，《misérable lscéérat》の評伝を書こうとした Stendhal の意図は何だったのだろうか。

Stendhal が *Vie de Napoléon* を執筆した動機についてはこれまで Stendhal 研究家たちがいくつかの見解を示してきた。例えば，L. Royer は，1817年のフランス滞在の際直接見聞した極右王党派の行動に対する嫌悪感が Stendhal を執筆へと駆り立てたと説明する。[19] これに対し，Del Litto は，L. Royer の見解を尊重しつつも，Stendhal に執筆を決意させた要因にイギリス人の歴史家 Hobhouse の影響をあげ，これを強調する。Stendhal は1816年10月に，当時詩人の Byron とともにミラノを訪れていた Hobhouse と会見している。Hobhouse は Napoléon の百日天下に関する著作を発表したばかりであり，Napoléon 讃美者でもあった。Del Litto は，おそらく Hobhouse が Stendhal に執筆を勧めたのであろう，

と言う。[20]

ここで，私の考え方を示したい。Stendhal は，*Vie de Napoléon* を執筆することにより，Napoléon あるいは Napoléon のフランス支配を王政復古という現在的時間との関連の中で公平な立場から考え直してみようとしたのではないだろうか。彼には，最初，王政復古批判をしようとか，Napoléon の弁明に立とうとかの野心的な意図は全くなかった。前述の *Edinburgh Review* の記事を翻訳しながら，Stendhal は次のように書いている。

"Sentiments du traducteur.

Je méprise et déteste l'usurpateur dans les rapports présents et futurs qu'il peut avoir avec la France, mais je désire connaître cet homme extraordinaire."[21]

Stendhal を *Vie de Napoléon* 執筆へと駆り立てたものは，ここに示されているように Napoléon を知りたいという欲求に他ならなかったと思われる。すでに見たように，王政復古が暴政の渕へと陥った時，Stendhal は帝政時代に一種の郷愁を覚えた。Napoléon を見直すまでに至る。統領政府時代，帝政時代を通じて，Stendhal の内には Napoléon について，独裁者，自由の敵としての像が定着していた。ところが，王政復古が好ましからざる方向に進んでゆくにつれ，Stendhal は Napoléon に対する認識の転換を迫られる。時まさに，王政復古に不安をもつ民衆の間で Napoléon の姿が独裁者から自由主義者，共和主義者としての姿へと変容してゆく気運にあった。つまり，伝説としての Napoléon 像が定着しようとしていた。しかし，この時期，Stendhal は Napoléon を個別に取り上げて批評していたわけではなく，Napoléon 再評価も常に王政復古批判と表裏一体を成すものであった。したがって，Napoléon 観も未だ明瞭な輪郭をもっていない。未だ Napoléon を判断する上でのはっきりとした基準ができあがっていないからである。このような時，Stendhal は心情的な再評価の段階を超え，できるだけ公平な史的考察によって Napoléon の全体像を把握しようとしたのではないだろうか。史実を通して客観的な Napoléon

像を構築することが第一義的な課題となっていたように思われる。執筆過程のところで見たように，Stendhal が，最初，彼自身の考え方を書き進めるというより，専ら資料を読みあさっていたことからもこのことは明きらかである。こうして Napoléon への関心が最高潮に達していた時，彼は偶然目に留めた *Edinburgh Review* の記事に触発された。しかし，この時はまだ Napoléon に対する最終的評価がどのようになるか Stendhal 自身にも予測がつかなかったに違いない。

しかし，執筆を進めてゆくうち，Stendhal の内には明確な Napoléon 像が少しづつ形を成してゆく。Napoléon を独裁者とする考え方を最後まで捨てているわけではないが，Stendhal の内で Napoléon 像が輪郭を整えてゆくにつれ，最初，Napoléon を《misérable scélérat》としていたような露骨な敵意は消え去り，ついに1818年1月，つまり執筆が一時中断される直前には次のような文章が現れる。

"Pensées *for the life*. (En janvier 1818)

La faiblesse et le gribouillage dans les affaires nous déplaisent si fort que nous en venons à admirer la force et le gouvernement de fer, même employés contre nos libertés.[22]"

1818年6月，Madame de Staël の遺著 *Considèrations* に接する時までには，これを中傷とし，これに激怒する準備はできていた。Stendhal は Madame de Staël のこの著作を読んだ直後，1818年6月13日から数日をかけてこの著作についてのかなり長い書評を書いている。[23] この中で，Stendhal はあからさまな怒りを Madame de Staël にぶつけた後，初めて「崇拝する」adorer という言葉を用いて Napoléon を次のように擁護している。

"Napoléon n'était nullement philosophe comme nous. Il jugeait par les faits et quoi que notre gouvernement actuel soit cent fois plus libéral que le sien, la France a été moins heureuse en 1818 et 1814 qu'en 1800-1812.

〔.....〕

J'abhorre Napoléon comme tyran, mais je l'abhorre *tout juste* les pièces à la main. Napoléon condamné, j'adore poétiquement et raisonnablement une chose extraordinnaire : le plus grand homme qui ait paru depuis César [……][24]"

このように，Vie de Napoléon を執筆する過程において初めて Stendhal の Napoléon に対する感情は崇拝と言えるものにまで高められ，定着したのである。特に，Madame de Staël の *Considérations* は，Stendhal の中に Napoléon に対するもはや動かしようのない感情，詩的なものにまで高められた崇拝を植えつける上で決定的な役割を果たした。

## 3. 分　析——Analyse

これまで見てきた *Vie de Napoléon* 執筆過程での様々な経緯を踏まえた上で，いよいよ *Vie de Napoléon* の内容分析に入ることにしよう。

Stendhal は *Vie de Napoléon* の中で，政体の発展段階についてかなり明確な見解を打ち出している。これは決して独創的な見解とは言えないが，彼が Napoléon を論ずる際の理論的基礎となっているので，まずこの見解を示しておこう。

"La démocratie ou le despotisme sont les premiers gouvernements qui se présentent aux hommes au sortir de l'état sauvage ; c'est le premier degré de civilisation. L'aristocratie sous un ou plusieurs chefs—et le royaume de France avant 1789 n'étant qu'une aristocratie religieuse et militaire, de robe et d'épée—l'aristocratie, quelque nom qu'on lui donne, a partout remplacé ces gouvernements informes. C'est le second degré de civilisation. Le gouvernement représentatif sous un ou plusieurs chefs est une invention nouvelle et très nouvelle qui forme et constate un troisiéme degré de civilisation.[25]"

こうして，政体の発展段階を三つに分けた後，Stendhal は Napoléon を次のように位置づける。

"Napoléon fut ce qu'a jamais produit de mieux le second degré de civilisation.[26]"

この文章からは次の点が明きらかとなろう。つまり，Napoléon の政治が，旧体制下での絶対王政とは性格を異にするとしても，代議制を実現し得ていない点で広義の aristocratie に属するとされていること。また，aristocratie に次いで代議政体 gouvernement représentatif が出現したところで，文明は一段上の段階に入るという文明史観を Stendhal がもっていたことである。

それでは Stendhal は，「文明の第二段階が生み出した最高の存在」が辿った軌跡をどのように描いているだろうか。コルシカでの誕生よりエルバ島からの帰還までを扱った *Vie de Napoléon* において，Stendhal は，権力の座についてからの Napoléon を時期別に革命の子，独裁者，絶対君主とはっきり描きわけている。Stendhal 自身は時期区分までは行っていないが，この三つのナポレオン像は，Stendhal の叙述に従ってそれぞれ次の三つの時期にあてはめることができよう。

第一期，1799年のブリュメール18日のクーデターから1802年まで。

第二期，1802年6月から1808年終わりまで。

第三期，1809年から帝政の崩壊まで。

Stendhal は，1799年ブリュメール18日のクーデターによって権力の座についてから1802年までの Napoléon は革命の子でありえたとする。第一期は，次の文章に要約されるように，Napoléon の独裁が最も有効に行使され，またフランス国内の危機的状態により正当化されうる時期であった。

"Dans les premiers mois de son consulat, il exerçait une véritable dictature, rendue indispensable par les événements. Talonné à l'intérieur par les Jacobins et les royalistes, et par le souvenir des conspirations récentes de Barras et de Sieyès, pressé à l'extérieur par les armées des rois, prêtes à inonder le sol de la République, la première loi était d'exister. Cette loi justifie à mes yeux toutes les

mesures arbitraires de la première année de son consulat.[27]"

Stendhal はさらに，Napoléon の行政上の手腕を無能な王政復古の政府と暗に対比させながら次のようにも言っている。

"Très souvent la tyrannie était exercée dans l'intérêt général : Voyez la fusion des partis, l'arrangement des finances, l'établissement des Codes, les travaux des ponts et Chaussées. On peut concevoir au contraire un gouvernement qui ne fasse éprouver que peu de gêne à l'individu parce qu'il est faible, mais qui emploie toute sa petite force à molester l'intérêt général.[28]"

Napoléon はすでに最初から危険な野心を内に秘めてはいた。しかし，彼はフランスをそれがおちいっていた混乱から救った。Napoléon が「救世主」としての自覚をもってエジプトから戻った時，彼を待ち受けていたものは，総裁政府の腐敗，諸党派の対立，軍隊の滑走，フランス侵入をねらう外国勢力であった。フランスは不穏な状況を迅速かつ適切に収拾する能力のある人物を必要としていた。Napoléon がまさにこうした要求にこたえうる唯一の人物であったし，ブリュメール18日以後二年間，要求されていたことを立派に遂行した。これが Stendhal の考え方である。当時 Napoléon の手で早くも始められていた言論統制すら Stendhal は正当化する。Stendhal は Napoléon の反自由主義的体質を次のように説明する。

"Donner d'abord au peuple français antant de liberté qu'il en pouvait supporter, et, graduellement, augmenter la liberté à mesure que les factions auraient perdu de leur chaleur et que l'opinion publique serait devenue plus calme et plus éclairée, tel ne fut point l'objet de Napoléon. Il ne considérait pas combien de pouvoir on pouvait confier au peuple sans imprudence, mais cherchait à deviner de combien peu de pouvoir il se contenterait.[29]"

しかし，自由の問題について Stendhal が非難するのは国民の方である。Stendhal によれば，第一執政 premier consul が出版の自由，個人の自由を奪った時，国民は完全に無関心な態度をとったのであり，Napoléon

の数々の遠征がもたらす戦利品や "l'égalité politique qui permet à tous l'espérance d'arriver à toutes les places"[31] に虚栄心を満足させていたのである。

Mme de Staël はじめ Napoléon に敵対する人々が人類の不幸を見ていたイタリア，スイス，ドイツなどに対する侵略行為すらも，この時期にあっては次のように正当化される。

> "Depuis un siècle, ce n'est pas précisément de bonnes intentions que l'on manque en Europe, mais de l'énergie nécessaire pour remuer la masse énorme des habitudes. Tout grand mouvement ne peut être désormais qu'à l'avantage de la morale, c'est-à-dire du bonheur du genre humain. Chaque choc qu'éprouvent toutes ces vieilleries les rapproche du véritable équilibre."[32]

Napoléon の遠征は革命思想の伝播としての役割を果たすものである。つまり，ヨーロッパを旧弊な封建制のくびきから解き放つものである。したがって，Napoléon 戦争は人類の不幸であるどころか人類の幸福に貢献するものであったとされている。

第二の時期に移ろう。これは，Stendhal によれば，Napoléon の繁栄が頂点に達する時期である。1804年には皇帝即位への野心を果たした。アウステルリッツの戦い，イエナの戦いをはじめとする大陸戦争を，Stendhal は，皇帝の軍事的名声に新しい華々しさを与え，ヨーロッパがCharlemagne の時代以来いかなる君主のうちにも見出しえなかったほどの権勢の極点に彼をのしあげたもの[33]，と表現している。この繁栄は，スペイン戦争が開始され，Napoléon 自ら兵を率いてマドリードに入る1808年12月頃まで続く。フランス軍は決定的勝利を得られないままスペイン国民の抵抗に苦しむ。Stendhal は，スペイン戦争が Napoléon の繁栄から凋落に移る一つの分岐点にあたると言っている。

> "La guerre d'Espagne marque à la fois l'époque de la décadence de la puissance de Napoléon et l'époque de la décadence de son génie. La prospérité avait graduellement changé et vicié son ca-

ractère.[34]"

第二期における Napoléon は政策面においても，独裁者，王位簒奪者としての姿を露骨に示す。革命の子たる性格も放棄している。しかし，Napoléon の軍人としての崇高さ，彼の成し遂げた「Charlemagne 以来」の軍事的偉業に Stendhal が魅了されているといった態度で執筆を続けていることは興味深い。

最後の第三期に入ろう。Stendhal はこの時期の Napoléon を次のように要約する。

"Puisqu'il renonçait à être *le fils de la Révolution*, et qu'il ne voulait plus être qu'un souverain ordinnaire, répudiant l'appui de la nation, il fit fort bien de s'assurer celui de la famille la plus illustre de l'Europe.[35]"

革命の子であるどころか，革命から遠ざかることによってのみ自ら築きあげた独裁体制を守りぬこうとする Napoléon あるのみである。その上，マレンゴの戦いの頃の軍事上の冴えもない。

"Treize ans et demi de succès firent d'Alexandre le Grand une espèce de fou. Un bonheur exactement de la même durée produisit la même folie chez Napoléon. La seule différence, c'est que le héros macédonien eut le bonheur de mourir.[36]"

このように帝政末期の Napoléon は Stendhal によって徹底的な批判を浴びせられている。

Stendhal にとって Napoléon は，"homme doué de talents extraordinnaires et d'une dangereuse ambition[37]" という言葉に要約される。Stendhal は，Napoléon の政治家としての欠点は二つに要約されるとして，"Il eut toujours peur du peuple et il n'eut jamais de plan[38]" と言っているが，こうした欠点のため，また個人的な野心から脱却できなかったために，Napoléon は国民に自由を与えることをせず，代議制を実現することもできなかった。ひたすら独裁者としての道をつきすすみ，ついにはその繁栄のために革命の子たる性格を放棄し，腐敗した皇帝になりさがって

しまった。こうして民主主義を理解できなかった Napoléon は「文明の第二段階」を脱却できなかったというわけである。

## 4. ロマネスク——Romanesque

このように，Stendhal は政治家としての Napoléon の本質を見失ってはいない。むしろ，彼は百日天下をも含め15年にわたる Napoléon のフランス支配に全体としては否定的評価しか与えていない。

こうした Stendhal の Napoléon 批判者としての側面は，例えば *Le Rouge et le Noir* の第二部第一章，《Les plaisirs de campagne》に登場する Saint-Giraud という人物像の中に見ることができる。Saint-Giraud は，Stendhal 自身のそれに極めて近い人生観をもった人物として描かれている。44才，「音楽を愛し，絵画を愛し」，「良い本を読むことを一つの事件と考え」ている。そして，この物語に登場する五年前に，パリでの生活に飽き，ひたすら静寂と素朴な生活を求めてリヨン近郊のローヌ河畔の谷間に落ちつく。しかし，いかなる党派にも属さなかったために，結局田園生活から追い出される羽目になり，それが Napoléon のためだと言う。つまり，彼を田園生活から追い出すのは，Concordat によって Napoléon が復活させた僧侶と貴族だとするのである。そして，皇帝に対しては次のような厳しい批判を行う。

> "Ton empereur, que le diable emporte, n'a été grand que sur ses champs de bataille, et lorsqu'il a rétabli les finances vers 1802. Que veut dire toute sa conduite depuis? Avec ses chambellans, sa pompe et ses réception aux Tuileries, il a donné une nouvelle édition de toutes les niaiseries monarchiques.[39]"

こうした Napoléon 評価は，*Vie de Napolèon* の中で見たように，一面において Stendhal 自身の評価とも一致している。

Stendhal は現実の Napoléon を知っているだけに，ある時期以降の Victor Hugo がそうであったような無条件の Napoléon 讃美者にはなりえなかった。しかし，Stendhal にあっては，事実が単に事実としてのみ処

理されることはない。透徹した目で Napoléon の本質を見抜きながらも，一方で，Stendhal は理性を超えたもの，さらに，時には自分そのものをも Napoléon の内に見出している。そして，この Napoléon が，低俗と凡庸が支配する王政復古期，七月王政期の社会と二重写しにされる時，この「一九世紀の英雄」は，尊敬の対象となる唯一の存在，時代を超えて熱狂的な人々を刺激する存在となる。20年後，Stendhal は第二の Napoléon 伝，*Mémoires sur Napoléon* の中で次のように言う。

"En lisant l'histoire ancienne, dans la jeunesse, la plupart des cœurs qui sont susceptibles d'enthousiasme, s'attachent aux Romains et pleurent leurs défaites.....Par un sentiment de même nature, on ne peut plus aimer un autre général après avoir vu agir Napoléon.....L'amour pour Napoléon est la seule passion qui me soit restée ; ce qui ne m'empêche pas de voir les défauts de son esprit et les misérables faiblesses qu'on peut lui reprocher.[40]"

Stendhal は小説の中では，Napoléon の一五年のフランス支配の具体的な内容にはほとんど触れることはない。むしろ，極力避けている。Stendhal は，小説の中に，Napoléon を無視しては語りえないいくつかの人物を登場させはした。が，Stendhal が語る Napoléon は死後の Napoléon であり，Napoléon の死後人々の心の中に残っていた Napoléon であった。つまり，伝説と化した Napoléon であった。Julien Sorel は，1830 年に 18 才という直接に Napoléon の治世を知らない世代に属している。Julien の Napoléon は *Mémorial de Saint-Hélène* の Napoléon であった。だからこそ，Stendhal も彼自身の中にあるロマネスクな Napoléon 像をよりよく Julien に投映させることができた。またこの Julien の Napoléon 像は，1830年に18才であったすべての青年にとっての一つの典型であったとも言えよう。

Stendhal は，Napoléon 伝説が成立，発展していった時期に伝説と化した Napoléon の影響を直接的に受けつつ本格的な著作活動を始めたという意味において，また，この伝説の成立，発展に彼自身寄与しているという

意味において，十九世紀の他の作家たちの中でも特異な位置を占めていると言えるのである。

**註**

(1) この二つの評伝は，Stendhal の草稿では，1817年—1818年に執筆された方には*Life*，1837年—1838年に書かれた方には *Mémoires sur la vie de Napoléon* の表題が記されている。しかし，Champion 版，Le Divan 版の Stendhal 全集には，二つの評伝はそれぞれ *Vie de Napoléon*, *Mémoires sur Napoléon* の題名で収められており，現在では一般に，この全集に用いられた題名の方が通用している。

(2) M. Bardèche, *Stendhal romancier*, La Table Ronde, 1947, p. 192.

(3) *La Chartreuse de Parme* とほぼ同じ時期に書かれた第二の Napoléon 伝，*Mémoires sur Napoléon* の中で Stendhal は次のように書いている。

"J'ai cru devoir donner beaucoup de développements à la campagne d'Italie de 1796 et 1797. C'était le début de Napoléon. Suivant moi, elle fait mieux connaître qu'aucune autre et son génie militaire et son caractère. 〔……〕 on trouvera que c'est peut-être la plus belle campagne de Napoléon. Enfin, en 1797 on pouvait l'aimer avec passion et sans restriction ; il n'avait point encore volé la liberté à son pays ; rien d'aussi grand n'avait paru depuis des siècles." (Stendhal, *Mémoires sur Napoléon*, Le Divan, 1930, p. 19)

なお，*La Chartreuse de Parme* の中では，Napoléon が権力の座にあった時期，つまり1799年以降ほぼ15年間のことにはほとんど触れられていないことは興味深い。第三章においていきなり Warterloo の戦いの場面に移っている。

(4) K. G. McWatters, "La présence de Napoléon dans *la Chartreuse de Parme*", *Stendhal club*, nº 47, 15 avril 1970, p. 215.

(5) Jean Tulard, *Le mythe de Napoléon*, Armand Colin, 1971, p. 71.

(6) 三人の詩人の主な作品としては，Lamartine の《Bonaparte》(*Secondes Méditations*), Vigny の《Moïse》(*Poèmes*) と《La Vie et la Mort de Capitaine Renaud》(*Servitude et grandeur militaires*), Hugo の《A la Colonne》(*Les Chants du crépuscule*) が承げられる。

(7) V. Del Litto,《Postface》pour la *Vie de Napoléon* de Stendhal, Cercle du Bibliophile, 1970, p. 379.

(8) この点については，Stendhal の友人，Mérimée も当惑気味に次のように告白している。

"……Il était difficile de savoir ce qu'il pensait de Napoléon. Presque toujours, il était de l'opinion contraire à celle qu'on mettait en avant. Tantôt il en parlait comme d'un parvenu ébloui par les oripeaux, manquant sans cesse aux règles de la LO-GIQUE. D'autres fois, c'était une admiration presque idolâtre. Tour à tour, il était frondeur comme Courier, et servile comme Las Cases……(Cité par Claude Roy in *Stendhal par lui—même*, Seuil, 1968, p. 169)

(9) 例えば，次のような文章が見られる。

"Nous voyons parfaitement B〔onaparte〕, il passe à quinze pas de nous, à cheval……Il salue beaucoup et sourit. Le sourire de théâtre, où l'ou montre les dents, mais où les yeux ne sourient pas : le sourire de Picard." (14 juillet 1804, *Journal*, t. I, Le Divan. 1937, p. 166)

"Je réfléchissais beaucoup toute cette journée sur cette alliance si évidente de tous les charlatans. La religion venant sacrer la tyrannie, et tout cela au nom du bonheur des hommes. Je me rinçai la bouche en lisant un peu de la prose d'Alfieri." (9 décembre 1804, ibid., pp. 255-256.)

(10) 1814年3月，パリが連合軍に占領され，4月に Napoléon が退位すると，大革命中に処刑された Louis XVI の弟 Louis XVIII が連合軍に守られながらパリに帰還して王政復古と呼ばれる立憲君主制が開始される。これとともに，大革命中国外に亡命していた旧貴族たちが続々とフランスに戻ってきて，以後，Napoléon の百日天下を間にはさんで1830年の七月革命まで，大革命前の旧弊なさまざまの価値観と大革命以後の新しい思想とが真向から対立するフランス史の上でも特異な時代が展開されることになる。

(11) 《Lettres écrites de Méry-sur-Seine sur la Constitution》は，1814年5月当時における Stendhal の王政復古に対する考え方を知る上で重要な資料である。第3の手紙と第4の手紙は，Henri Martineau の手で1933年に Le Divan 版の Stendhal 全集に収められている (*Mélanges de politique et d'histoire*, t. I, pp. 35-44)。その後，H.-F. Imbert が，第1の手紙と第2の手紙を発見し，これをかなり詳細な分析とともに発表した (*N. R. F.*, 1er septembre 1960, pp. 568-584)。また，H.-F. Imbert は，*Les métamorphoses de la liberté* と題する Stendhal 研究の中でもこの《lettres》について論じている (*Les métamorphoses de la liberté*, José Corti, 1967, pp. 40-49)。この《Lettres》からもわかるように，この時期，Stendhal は，特に亡命貴族の行動に危惧の念をもちながらも，概ね王政復古の将来には楽観的な見方をしていた。

(12) Stendhal, *Mélanges intimes et Marginalia*, t. I, Le Divan, 1936, p. 215.

(13) それまでに二度，Romain Colomb, Jean de Mitty により草稿の一部が発表されたことはある。Stendhal の死後，草稿を手にした R. Colomb はこの未完の作品をそのままの形で出版するのは不可能と考え，彼自身の判断に基いて独創的と思われる部分だけを取り出し，しかも勝手に書簡の形に変えるなどして，1854年に刊行された Stendhal の *Correspondance* の中に挿入した。また，Jean de Mitty も，1898年，草稿の一部を *Napoléon* と題する本にして出版している (Cf. L. Royer, 《Avant-propos》 de la *Vie de Napoléon*, Cercles du Bibliophile, 1970, p. XLI.)。

(14) V. Del Litto, *La vie intellectuelle de Stendhal*, pp. 563-565.

(15) この頃，Stendhal が用いた参考資料については，L. Royer, op. cit., pp. XLI-XLVIII に詳しい。

(16) *Vie de Nopoléon*, Le Divan, 1930, p. 3.

(17) V. Del Litto, *En marge des manuscrits de Stendhal, compléments et fragments inédits*, P. U. F. 1955, p. 331.

(18) Ibid., p. 340.

(19) L. Royer, op. cit., pp. XXXI-XXXIII.

(20) V. Del Litto, *La vie intellectuelle* de *Stendhal*, pp. 563-564.

(21) V. Del Litto, *En marge des manuscrits de Stendhal*, p. 330.

(22) *Mélanges intimes et Marginalia*, t. II, Le Divan, 1936, p. 15.

(23) *Mélanges de Littérature*, t. III, Le Divan, 1933, pp. 177-195. に収められている文章がこの書評である。

(24) Ibid., pp. 193-194.

(25) *Vie de Napolèon*, Le Divan, p. 330.

(26) Ibid., p. 330.

(27) Ibid., p. 64.

(28) Ibid., p. 73.

(29) Ibid., p. 65.

(30) Ibid., p. 73.

(31) Ibid., p. 72.

(32) Ibid., p. 75.

(33) Ibid., p. 107.

(34) Ibid., p. 165.

(35) Ibid., p. 118.

(36) Ibid., p. 170.

(37) Ibid., p. 335.

(38) Ibid., p. 70.

(39) *Le Rouge et le Noir*, Garnier, 1973, p. 222.

(40) *Mémoires sur Napolèon*, Le Divan, 1930, p. 17.